人はなぜ飛ぶのか　（２０１１，２，２１～３，７）

「人は何のために働くのか」という題でコラムを書かれていたのは東レ経済研究所特別顧問の佐々木常夫氏（毎日新聞２０１１．２．１９）である。妙に興味をひかれ読んでみた。そこで私は「人はなぜ飛ぶのか」を考えることにした。

コラムでは「人間は自己実現に向かって絶えず成長する生き物である」と仮定し、人間の欲求を５段階に分けて理論化した。いわゆる「マズローの欲求段階説」である。第１「生理的欲求」第２「安全の欲求」第３「所属と愛の欲求」第４「承認の欲求」そして第５段階が「自己実現の欲求」に分けられる。

第１の「生理的欲求」とは食欲、性欲、睡眠欲などの本能的な欲求でこれが満たされていないと人間は生きていくことが難しくなる。飛んでみたいというような欲求があるとしても、もしそれが無くなれば人間は生きていけないかというと、そうではなく生きて行けるのでこれには属さないであろう。属さないというかこれは基本的な欲求であるのでこれがなければスタートしない。

第２の「安全の欲求」ではどうか。私たちが生活をしていくうえでの安全という意味であろう。誰もが危険でないことを祈っているはずである。なるほど飛び込み競技は危険という事キーワードがついてまわる。しかし、正しく指導すれば安全な競技であることは間違いない。正しく指導する指導者がいるかといえば、なかなかいないのが現状ではないだろうか。この欲求を満たすことこそ飛び込み競技の発展につながるという事がいえるかも知れない。

第３の**「所属と愛の欲求」**では、最初は家族という集団からはじまって、子供の小集団。集団の一員という意識が目覚めることが精神的な安定感を満足させるのだ。このチームに入りたいとかこのコーチにみてもらいたいとかの欲求で、集団的な場所に自分をおいてそこから出てくる欲求という事がいえる。次に愛情の欲求である。これは自分の欲求をみたしてくれる人を対象にし、より多くの満足を求めようとする欲求で２~３歳にあらわれる。対象は母親である。その後だんだんと広範囲になっていく。このときの飛び込み競技との出会いが素晴らしいものであればあるほどのめりこむ人は増える。この人がいるからこのチームとか、こういうチームだからとかである。この欲求が高まれば「この人のために」とか「このチームのために」という他のものにどう自分がかかわっていくかを決定する。だんだんと社会性がついてくる段階であると思う。

第４の**「承認の欲求」**となるとどうであろうか。第３から第５へと発達する中で他人の人格・思想・行為などを優れたものとして敬いながら、自分も同様に尊敬・承認されたいという欲求である。この点からみてもコーチたる人は人格ともに優れている人が望まれる。競技からすれば今の演技はいいか、悪いかを認めるという事であろうか。それとコーチの言う助言を聞き入れる。という他のことに対して認める、聞き入れるということである。

第５の**「自己実現の欲求」**。第４で優れた人からいろいろ学んだことがらは、自己実現の

欲求へと進む。自分の考えとして、自分の意識として確立していく。それが個性となって社会の中で生きていく。

さらにマズローは、自己実現している人は高次の欲求を持っている。つまり、**「統一性」「完結性」「複雑性」「単純性」「正確さと表現」「独自性」「自律性」**などを有しているというのだ。全体の流れという意味で統一性、本質性への欲求、美を意識する正確さと表現形式、技を通じて個性を出す独自性、入水へのこだわりにみられる完結性、自ら進んで練習に取り組もうとする**活動性**もある。飛び込み競技を本気でやってみようという人は、やってみたいという人は・・・。ではなくてやっている人は、このような高次の欲求を持ち合わせている。要するに選手として育っていくときに必要なものである。

したがって、第４レベルまでは選手として育っていく過程である。そして、さらに第５レベルへと続いていく。ここでは一選手として、又選手を超えて人間としての可能性が問われる。日本を相手にあるいは世界を相手にどこまで通じるか。そしてどこまで成長して、向上していくかである。**「人はなぜ飛ぶのだろう」**他愛もない疑問かもしれないが、それなりの疑問であったようである。自分自身選手として**育っていくときの「飛ぶ」**と、選手になってからの目指すものが**はっきりしている時の「飛ぶ」**とは少し違ったようである。

同じように佐々木氏は、「もう１つ高い段階がある。人は自分を磨くために働く」ということである。魂を磨くこと、自分を磨くことによって神や聖人に近づき、自分も人も社会もさらに幸せに近づくと言っている。マザー・テレサやガンジーのような人であるらしい。このような人の存在自体が自分、他人、社会を幸せにいていくようである。